

開催館名 鈴鹿市考古博物館

企画展名 塩を作り、運ぶ～伊勢湾をめぐる～

開催期間：2019年10月12日（土）～2019年12月15日（日）



【企画展の内容・目的】

- 日本古代における土器を使った塩作りについて、伊勢湾を中心に展示し、その歴史や古代の人々の生業について紹介しました。また、伊勢、志摩、尾張、三河など海に面した地域同士の「海」の道による人々の交流・物流について、伊勢湾を中心に紹介しました。
- 土器を使った塩作りの体験講座をとおして、魚や貝類など生き物以外にも「海」の恵があることを学習することで、子どもたちの考古学・「海」に対する関心を高め、古代の人々の努力や工夫、「海」の大切さについて考える機会としました。
- 一般的にはあまり知られていない資料を展示するため、展示資料をより理解しやすくできるように、研究者による展示内容に沿った講演を通して理解を深めました。

1. 企画展示の内容

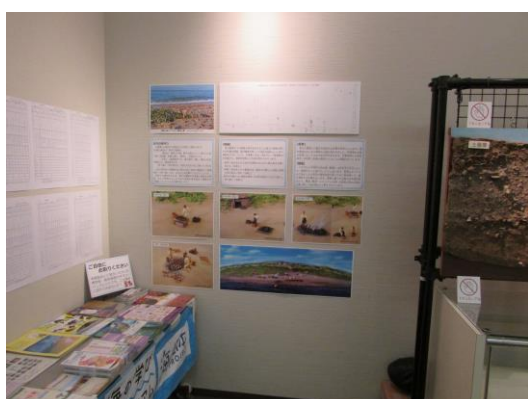
- 開催期間：2019年10月12日（土）～2019年12月15日（日）
- 開催場所：鈴鹿市考古博物館 特別展示室
- 入場者数：1,125人



鈴鹿市考古博物館 外観



企画展会場 入口



第1部 土器製塩の基本

古代の塩作りにおいて「海水」、「海草」を使用して作られていたこと、「塩」が海の恵みであったことを紹介するため、東浦町教育委員会所蔵の「古代の塩作り」の模型の写真を用いて、塩作りの作業工程を解説し、実際に製塩土器を廃棄した層の剥ぎ取りから、大量生産された様子を展示しました。また、万葉集に詠まれた「藻塩焼く」の言葉を考古学的に検証するために微小生物を展示しました。この微小生物は、塩作りに使われたと考えられる海草に付着するもので、焼けた痕跡から「藻（海草）」を焼いて塩作りに使ったと考えられることを展示しました。

これらの展示から、土器による塩作りを理解し、古代の人々と海との関りについて理解を深めました。



第2部 塩を作る (写真：左)

伊勢湾沿岸を中心に大阪湾周辺、若狭湾、能登半島の製塩土器を展示しました。伊勢湾東岸地域等に影響を与えた大阪湾周辺の製塩土器の形から独自の形に変化していく過程から人々が「海の恵みである塩」を得るための知恵や工夫について学習し、古代の生活の中で「海」と大きくかかわりを持っていたことについて理解を深めました。

第3部 塩を運ぶ (写真：右)

伊勢湾東岸(愛知県)から西岸地域(三重県)へ運ばれた製塩土器や三重県内から出土した伊勢湾東岸地域の製塩土器の分布図や鈴鹿市内で生産され、知多半島や渥美半島などに運ばれた須恵器など展示し、伊勢湾を介した交流について展示し、「海」が果たした役割について理解を深めました。



第3部 塩を運ぶ (写真：右)

「海の恵み」である塩が遠方へと運ばれたことについてより分かり易くするため、平城宮・京から出土した木簡(実物・レプリカ・写真パネル)を展示しました。荷札としてつけられた木簡を実物大のパネルを作成し、手に取って試みる事が出来るように展示したことで、資料との距離感を縮め関心を高めました。

第4部 伊勢神宮の塩作り (写真：左)

誰もが知る伊勢神宮においては、神事に必要な塩を古来の手法に則った生産を現代でも行っており、「神宮の御塩」を取り上げることで、古代の塩作りを身近なものとして考えることができるように写真パネルを展示しました。伊勢神宮では「海」から直接海水を塩田に引き入れているのではなく、五十鈴川の河口の汽水域から水を塩田に引き入れています。このことから「海」と「川」はつながっており、「海」の恵みである塩は間接的に得ることもできることを学習し、その多様性について理解を深めました。



参考展示（写真：左）

プレイベントとして夏休みに開催した土器ドキワークショップ「土器で塩を作ってみよう！」の内容を作業工程の解説・体験状況の写真のパネルや実際に使用した土器を展示しました。「塩」そのものが発掘調査で出土することはなく、考古資料として展示することはできないため、体験で作った塩から「海の恵み」である「塩」の存在を実感できるようにしました。また、体験に参加した子供たちの感想を展示し、その感想から、「海」の恵である塩を得るための大変さ、効率よく得るための古代の人々の工夫などに対する理解を深めました。

参考展示（写真：右）

三重県水産研究所が行っている研究・活動成果を展示し、現在の伊勢湾の環境について理解を深めました。



【来館者の声】

- 海のスゴさを感じた。まさに宝石がつまっているような気がする。
- 塩が普通にとれるように、有害物質が流れ込まないようにしなければならない。
- 海からしおがとれるとって海を守ろうとおもいました。
- 海の重要さとそのめぐみを大切にすること。古代人の工夫・努力に感動しました。海を大切にしなければなりませんね。古代人にもおしえられました。
- 塩が古来から人間の生活にいかに大事わかりました。又、体験された子供たちの感想を読ませていただきとても学び深いものがあったと感激しました。

2. 関連事業の内容

■関連事業名：関連講演会（連続講座全3回）

【開催日時】①2019年10月19日（土）13:30～15:30
②2019年11月2日（土）14:00～16:00
③2019年11月17日（日）14:00～16:00

【開催場所】鈴鹿市考古博物館 講堂

【参加者数】①42人 ②42人 ③36人 合計 120人

【実施内容・目的】

- 一般的には知られていない資料を展示するため、展示資料をより理解しやすくできるように、研究者による展示内容に沿った講演をしていただきました。
- 「伊勢湾の塩づくり」を西岸と東岸に分け、伊勢・志摩編、尾張・三河編としました。また、生産地だけでなく、多くの塩が運ばれた大消費地である平城宮・京を取り上げ、土器以外にも木簡など文字資料など豊富な資料から古代の塩について理解を深めました。さらに聴講者の疑問にも答えていただき、一層の理解を深めることができました。



第1回は、「伊勢湾の塩づくり～伊勢・志摩編～」と題し、三重県埋蔵文化財センターの新名強氏に三重県内の遺跡から出土する志摩式製塩土器や知多式製塩土器、文献資料からわかる伊勢神宮にかかわる塩など、多岐にわたる講演をいただきました。志摩式製塩土器は使い方について、まだまだ解明できていない点があることを知っていただきました。



第2回は、「伊勢湾の塩づくり～尾張・三河編～」と題し、愛知県埋蔵文化財センターの早野浩二氏に愛知県内の製塩活動について、成立から展開まで講演していただきました。弥生時代末から古墳時代初頭における大阪湾周辺からの受けた影響のほか、古墳時代中期の技術伝播について新たな見解を示していただきました。また、鈴鹿市内に本拠地とする大鹿氏と三河国大壁郷の関連について知っていただきました。



第3回は、「平城京に運ばれた塩はどこから来たのか？」と題し、奈良文化財研究所の神野恵氏に平城宮・京に運ばれた塩について、製塩土器だけでなく、木簡などの文字資料からわかることについて講演いただきました。塩は食用に用いらただけでなく、工業用にも使用されていたことや藤原京から平城京に遷都した際に増税されたことなども知っていただきました。また、奈良時代の人々は、塩が土器で作られていたことから土編の「塩」の文字を使っていたのではないかという私見も紹介されました。

【来館者の声】

- 海水はわれらの源であると感じた。
- 流通が陸路ではなく、海でつながっていて、遠くまで人々が行っていたことがわかりました。海は汚さずいつまでもきれいでいてほしいです。
- 塩には岩塩もありますが、やはり海水からつくられた海の恵みをより感じます。塩は、とても大事な物なので、「海が汚されていることに心が痛みます。放射能汚染水の放出やごみ問題など四方を海に囲まれた日本だからこそ海をきれいにしていきたいと願います。

■土器ドキワークショップ「土器で塩を作ってみよう！」

【開催日時】①2019年7月24日（水） ②2019年8月11日（土）
両日とも 13:30～16:00

【開催場所】鈴鹿市考古博物館

【参加者数】①24人 ②17人

【実施内容・目的】

- 特別展のイベントとして夏休み期間中に開催しました。
- 土器による塩作りの大変さを実感し、貴重な塩をもたらす「海」の重要性を理解しました。海の恵である塩を効率よく得るために古代人が行った工夫を学びました。伊勢湾の海水について学習することで、水質のきれいな豊かな「海」にすること、「海」を守ることにについて考えました。



体験の前に古代の塩作りの過程を学習し、体験内容の理解を深めました。また、鈴鹿市内と伊勢市二見で汲んだ海水を観察して、現在の伊勢湾の水質などについて学習しました。



脚部の形が違う土器を実際に砂に差し込み、古代の人々が土器に対して行った工夫を体験しました。また、海水と鹹水を用いることで塩のでき方の違いを観察し、塩作りの大変さを体験しました。これらの体験をとおして、「海」の重要性、古代の人々の知恵と工夫について、理解を深めることができました。

【来館者の声】

○あつかったけどしおができることが分かったのでたのしかったです。土器にかん水を入れて、ねっしたほうが海水よりすぐに塩ができた。もっとしおをつくりたかったです。たくさんの塩をつくるのにたいへんだったことが分かった。やよい時代から塩があっっておどろきました。

○かん水と海水をなめてくらべてみると、かん水がからくて、海水あんまりからなくなかったです。土器にかん水を入れて、ふっとうすると、土器のまわりに塩が出てきます。海水の方は、あまり塩が出ていなかったです。このように昔の塩作りが大へんだった事を学びました。

○一度にたくさんの塩をつくるために水に含まれている塩分の濃度を高くして、鹹水をつくった昔の人はすごいと思った。海水と鹹水では全々塩の量がちがい、鹹水にすることですごく効率が良いなっていることにおどろいた。

■ギャラリートーク

【開催日時】2019年10月26日（土）13：30～15：00

【開催場所】鈴鹿市考古博物館 特別展示室

【参加者数】4人

【実施内容・目的】

- 学芸員とともに研究者から展示資料の解説をすることによって、展示パネルでは説明が不足している点をより細かく解説しました。
- 展示資料だけでは見えない「海」について、担当学芸員・研究者が解説することによって、古代における人と「海」とのかかわりについて、実感することができ、より理解が深まりました。



各地の製塩土器の特徴、研究の状況について、学芸員と研究者によってひとつひとつ丁寧に説明しました。研究者の方には経験を交えながら、説明していただき楽しく学ぶことができました。

参加者が少なかったため、一人一人の質問に答えながら説明することができ、より深く理解することができました。

【来館者の声】

- 海の維持、管理一人が海を汚さない方法を生活の中で考えたい。
- 海の潮（塩）作りという特殊なテーマと展示物に感動した。海の大切さを感じた。
- 自然の力を感じた

【事業全体のまとめ】

- ・サポート事業を活用したことにより、石川県や福井県など遠方の資料を借用することが可能となり、例年よりも多数の資料を借用することができ、展示を充実させることができました。
- ・展示に関連したワークショップや関連講演会などを開催することで、子どもから大人まで「海の恵み」である「塩」について学ぶ機会を提供することができました。また、普段、意識することのない「海」の大切さ、「海」を守ることについて考える機会を提供することができました。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 三重県埋蔵文化財センター	資料・写真の借用
2. 三重県生涯学習センター	連携事業の実施
3. 三重県水産研究所鈴鹿研究室	研究成果の掲載
4. 志摩市教育委員会	資料の借用
5. 鳥羽市教育委員会・ 鳥羽市立海の博物館	資料の借用
6. 愛知県埋蔵文化財調査センター・ (公財)愛知県埋蔵文化財センター	資料・写真の借用 連携事業の実施
4. 東海市教育委員会	資料・写真の借用
5. 南知多町教育委員会	資料の借用
6. 刈谷市歴史博物館	資料の借用
7. 田原市博物館	資料・写真の借用
8. 大阪府教育委員会・ (公財)大阪府文化財センター	資料・写真の借用
9. 奈良文化財研究所	資料・写真の借用
10. 石川県埋蔵文化財センター	資料・写真の借用
11. 福井県美浜町教育委員会	資料・写真の借用
12. 東北歴史博物館	写真の借用
13. 土浦市教育委員会・ 上高津貝塚ふるさと歴史の広場	写真の借用
14. 神宮司庁	写真の借用

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 広報すずか	特別展「塩を作り、運ぶ～伊勢湾をめぐる～」
2. 中日新聞	古代の塩作り文化を紹介 令和元年10月29日
3. 伊勢新聞	古代の塩作り紹介 令和元年11月8日
4. 読売新聞	地域で変わる製塩土器 令和元年11月17日

以上